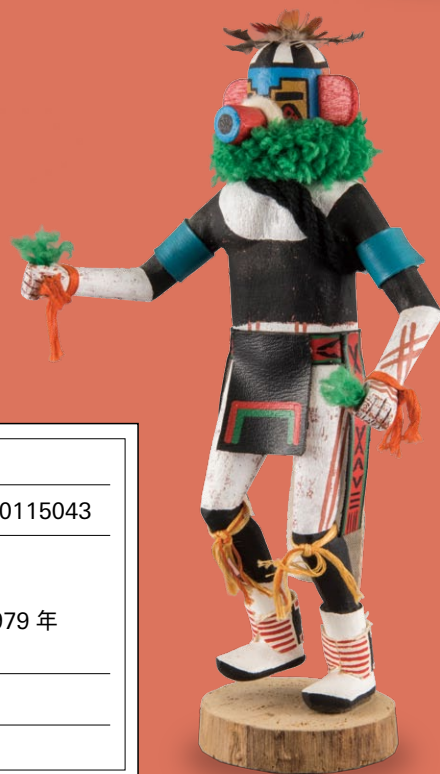


想像界の生物相 カチーナ人形

民博 学術資源研究開発センター 伊藤 敦規 いとう あつのり



資料名 | カチーナ人形

標本番号 | 上から H0085666、H0115042、H0115043

制作 | 上から
アーサー・ヨイワイテワ、1979年
アンドリュー・グローバー（推定）、1979年
ルディー・ポリアラ、1980年

地域 | アメリカ

高さ | 上から 24cm、27cm、29cm

米国南西部の乾燥地で農耕を営むホピ族をはじめとするプエブロ諸民族は、生存に欠かせない雨や雪や湿気、そして美や調和といった生活を豊かにする力そのもの、もしくはそうした力を携えて来訪する超自然的存在としてのカチーナやコッコ（以下、カチーナと総称）を信仰し、生命力の溢れる生活を期待する。カチーナはこの地域に生息する植物や動物をはじめ、雲や稲妻といった自然界の現象、太陽や星といった天体、さらに近隣に暮らす民族集団の特徴をあらわしたなど多種多様である。

◆◆◆定められた姿◆◆◆

カチーナは種類によって見た目が異なるが、基本的な構成は、頭部、胴体、四肢からなる。つまり擬人化されている。尾が生えていたり、腰帯や襟巻きなど何かしらの衣装を身にまといたり、靴を履くものもある。こうした衣装や身体のパイントは固定的で、状況に応じて変化するわけではない。外見だけでなく来訪する理由も定まっている。ホピでは二月ごろには驥の目的で子どもに恐怖を与える鬼のカチーナがやって来るし、三月ごろには村人に徒競走を挑むカチーナがやって来る。競争に負けた人間は、身体鍛錬を怠ったとして罰が与えられる。共通の祖先をもつ

と考えられている血縁集団（クラン）の守護的な役割をもつものもある。カチーナは木彫人形として具現化されることもある。おもにコットンウッド（ヤナギ科ハコヤナギ属のポプラ）の根を彫り、顔料で着色した人形は、儀礼のときにカチーナから女兒に手渡され、その後玩具となったり屋内の壁に飾られたりする。カチーナ人形はこの一〇〇年ほどで観光土産や芸術品として制作され流通するようにもなった。

◆◆◆引き継がれる記憶のなか◆◆◆

民博はホピ製とされるカチーナ人形資料を三〇〇体ほど収蔵している。数年前、ホピの宗教指導者やアーティストを招聘し、全点を確認してもらった。そのなかから植物に関連するいくつかのカチーナ人形へのコメントを紹介したい。

写真右上はスカッシュ（カボチャ）のカチーナで、地元ではタンカチーナなどと呼ばれる。頭部だけでなく胴体や四肢もカボチャ柄で覆われており、後頭部と両手にもった黄色いガラガラはその花をあらわしている。下帯を締め、毛糸を両手首と脛に結び、たすきがけをしている格好や、特に裸足の描写から走者のカチーナの一種であると推定された。ホピのアーティスト

によって絵画や木彫人形のモチーフとして選ばれる人気の高いカチーナだが、現在はその地域の儀礼にも登場しないため、実際に目にしたことのある作家は皆無だという。制作者のアーサー・ヨイワイテワ氏は何を参照しながらこの人形を彫ったのだろうか。写真中央の人形の底面には「Ushé, Hano Cholla Cactus, Grover」として記されている。英語のチョーラカクタスとはホピ保留地に自生するウチワサボテンのことだが、「Ushé」は「Oso」（植物に関連する接頭語）の表記違いではないかという見解が提示された。「Grover」というのは第一メサ地域に多い姓で、制作者名がすでに判明している他の人形資料と作風などを比較することでアンドリュー・グローバー氏作と推定された。写真下は主食であるトウモロコシのカチーナの一種で、斑模様はトウモロコシをあらわすアヴァツホヤとよばれる。この人形についても衣装、身体のパイント、羽根の描写の誤りが細かく指摘された。カチーナは歴史上のある時点である特別な力が擬人化され、その後は特定の儀礼に繰り返し同じ姿であられること、人びとの脳裏に刻まれていった。人形として具現化する場合も同様に、アーティストの創造性や記憶違いに由来する改変は基本的に好まれない傾向にある。